

プレス空知 2020年6月 旅するピアニスト 深井尚子

コロナもゆるやかに終息の様子が漂ってきました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。今月は、40年前(!)のウィーン留学の始まりについて、回想してみたいと思います。

40年も前になるとは、我ながら驚きますが、私は、留学のため、生まれて初めて単身でヨーロッパに向かいました。当時は、社会情勢が今とはかなり異なっていました。ロシアは、ソビエト連邦と呼ばれ共産主義の国家でした。それに伴って、オーストリアの東側、チェコスロバキア、ポーランドもソ連の領土で、また、ドイツも東西に分断されていました。それらの国では、ロシア語が話されていました。このように1980年代はアメリカとソ連の冷戦時代で、いわゆる鉄のカーテンが引かれており、西側と東側は経済にも文化にも大きな違いがある時代でした。

さて、そのような時代に北回りでウィーンに行くのに、最も格安なのがモスクワ経由のアエロフロートでした。しかし、今のように直行便はなく、なんと、モスクワの空港近くのホテルに一泊し、次の日のウィーン行きに乗るというフライトでした。なんとといっても冷戦時代のソ連のモスクワで、たった一人で一泊するのが不安で、モスクワの空港に着いて、パスポートを剥奪され(笑)、ホテル行のバスに乗せられた時は、「このまま、日本に帰りたい。」と思ったことを思い出します。モスクワの空港では、銃を持った兵士が立っていましたし、にこりともしない係員にひどい発音の英語で指示され、なんだかよくわからないままバスに乗せられた時は、強制収容所に向かうのではないか!!という不安にも襲われました。明日は、本当にウィーンに着くのだろうか・・・という心配と、暗くてかび臭いホテルのベッドを見た時は、絶望感にも襲われました。次の日は、朝食も出ましたが、石のようなパンと泥のようなコーヒーには口をつけられず、飛行機でもらったビスケットを食べたことを覚えています。今では、考えられないくらいソ連は貧しい国になっていた時期でした。それでも、次の日は、パスポートも返してもらい、予定より5時間遅れて(!)ウィーン行きの飛行機はモスクワを飛び立ち、7時間後には、無事、ウィーンに到着しました。

今の学生には、想像もつかない環境だと思いますが、ウィーンでピアノを学ぶという意志のもと、最初の難関をクリアできたことはちょっとした自信にもなりました。ウィーンに着いた時は、天国かと思いました(笑)。空港はきれいで美味しそうなケーキやお菓子があちこちに売られていて、カフェからは、いい香りのコーヒーの香りが夢のように感じました。

1991年のベルリンの壁崩壊後のヨーロッパの変化は劇的なもので、私の世代で留学した人たちは、その大きな時代のうねりの中に暮らし、今の近代化(笑)には驚くばかりです。オンラインで、オンタイムで大学の授業ができるなんて、当時は想像もできませんでした。